

潮流

刑 地

1969. 10. 6
大2号

行
商学部共・商会 識情宣局

十一月六日 國交改草示威行動

われわれは敵ではないが、敵をあなどってはならない。月4日の明治大学全学集会における学校側の敗北の意味したものはなんだらうか。この事情を、集会むけに学校から出された印刷物「明治大学全学集会」にあててと題する文の中に見ることができる。

われわれの提起している問題は、極めて理屈的な問題であるが、日本の全教育体系にかかる問題であり、そして絶対に答えることを避けたのが問題である。この問題提起の正しさは、10月4日の集会に結集した、それも全共斗のもとに結集した多教学生の意志により確認されている。われわれはこのような問題提起を、パリゲード構築という形で提起したわけだが、学校側はこのパリゲードを「極めて少教の学生のためのみ」としてのみ存在するとして、われわれ学生の力を弱めさせていた。われわれ学生の持つ、正しい問題提起に裏打ちされた力に対するあなどりは、当日の学校側の明白な敗北として終った。学校側は痕跡封諭もない、一片の学長告白で集会を終ようとしていたのであり、そのために体育会の組織的動員、機動隊の出動まで要請していのであるが、そもそもそれは学生の方によりけども粉碎された。

あの印刷物にかんして更に一言するならば、学校側はわれわれの方をあなどつばかりではなく、われわれの提起した問題の意味を真に捉えることができないということである。しかし、あの文章にかんするかぎり学校側はわれわれの全共斗運動をかほり正確に捉えていることを知らなければならぬ。パリゲードが思想の物徴化であり、全共斗の組織が敵後民主主義と

せに生れた学生会の暴力化の過程に、眞に周到な学生の組織として生れたことは一貫してわれわれの主張してきたことであり、印刷物にある通りである。しかし学校側は、われわれの問題提起に答えようせず、いたずらに学園の正常化を叫ぶところに、われわれを捉えることの限界があるといえる。

学園紛争の自主解決を促がすこと意図しに大学立法の方向と、学校側の打出した「大学改革準備委員会」の方向とどれだけの差があるというのだろうか。直率といわないうまでも、治安立派の尻馬に乗っていると言わざるをえない。ばざらば、学校側は現在の問題をかわる問題として答えるとする姿勢を一度も見せたことがないからである。そればかりか、機動隊導入ロッカー、アート区切りせりがら学生に圧迫を加え、学園の自治を自から放棄しようとしている。

— 10月斗争日程 —

10月6日 対改革委団交 三時記念館
8日 全国全共斗政治集会
一時記念館

9日 共斗討論集会
二時明治公園
二時十一号館三三教室
三時日比谷野音
一一時記念館

14日 反安保 佐藤説明阻止大討論会
0日 文化祭統一行動
五時記念館

20日 全明終決起集会
21日 同様反戦デー